

カキ「次郎」の新梢処理による優良結果母枝確保

～不定芽由来新梢を摘心処理により結果母枝として利用する試み～

関間貞雄（新城設楽農林水産事務所農業改良普及課）

【平成22年11月18日掲載】

【要約】

カキ「次郎」の不定芽由来新梢（注）を摘心処理することにより結果母枝として利用可能であるか検証した。1年目に不定芽由来新梢を6月中旬若しくは7月中旬に摘心処理し、2年目に処理枝から発生した新梢の着蕾数を調査した。結果としては、7月中旬に摘心処理した方が2年目に処理枝から発生した新梢の着蕾効果が高かった。また摘心処理前の新梢の長さは、40cm以下の短い方が着蕾効果が高かった。

（注）不定芽由来新梢：切り口などから突発的に発生する枝

1 はじめに

カキ栽培においては、省力化を目的とした低樹高栽培が行われているが、低樹高化のため主枝の切り下げを行うと、樹が栄養生長に傾くため不定芽由来新梢が多く発生し、また結果母枝数が少なくなるため収量は減少する。不定芽由来新梢は着果率が低い上、そのまま伸ばさせると果実への日当たりや農薬散布等の障害になることから、通常は利用せずに夏期せん定により除去されることが多い。着果率の低い不定芽由来新梢を結果母枝として利用するために、新梢基部に環状剥皮処理を行うと着果率が向上するという報告があるが、環状剥皮処理は技術的に難しく処理時間もかかる。そこで、カキ生産者が省力かつ簡単な作業で結果母枝を確保し収量を向上させるため、不定芽由来新梢の摘心処理が翌年の着蕾に及ぼす影響について検討した。

2 展示概要及び調査方法

（1）展示区の構成について

2008年度冬期に主枝の切り下げを行った樹齢48年のカキ品種「次郎」3樹から発生した不定芽由来新梢各10本（1区10本×3樹、調査本数計60本）に対し摘心処理を実施した（表1）。

表1 展示区の構成

区名	処理方法	処理時期
展示1区（6月中旬摘心）	新梢長が30cmになるように摘心	6月15日
展示2区（7月中旬摘心）	新梢長が30cmになるように摘心	7月13日

※30cm以下の新梢については先端を軽くとめる程度に摘心を実施した

摘心処理直前に新梢長を測定し、測定した長さに応じて、処理した新梢を3つのグループに分けた（表2）。

表2 グループ分けの概要

グループ名	新梢長 (摘心直前時)	本数 (樹・展示区ごと)
A	20～40cm	4本
B	41～70cm	3本
C	71cm以上	3本

(2) 調査方法

2年目の摘蕾時期（5月）に前年度摘心処理した2年枝から発生した新梢における着蕾数を調査した。



写真1 摘心処理後の新梢

3 結果

(1) 摘心時期と着蕾枝率

新梢に着蕾が1つでも確認された2年枝の割合を着蕾枝率として展示区別で比較した。展示2区（7月中旬摘心）の着蕾枝率は67.9%となり、展示1区（6月中旬摘心）の45.8%よりも着蕾枝率が高かった（図1）。

(2) 摘心時の新梢の長さとは着蕾枝率

展示区及び新梢の長さのグループ別に比較したところ、新梢の長さの短いグループA（40cm以下）では展示1区及び2区とも着蕾枝率が75%以上となり比較的高かった。一方、新梢の長いグループC（71cm以上）では展示1区及び2区ともに最も低い着蕾枝率となった（図2）。

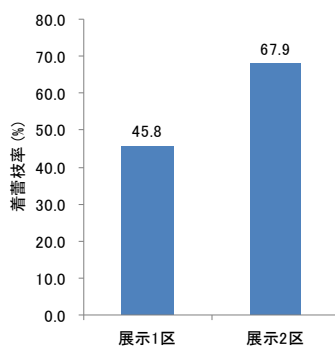


図1 展示区別の着蕾枝率

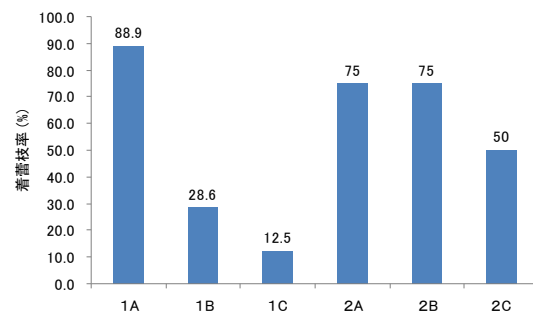


図2 展示区及びグループ別の着蕾枝率

4 まとめ

(1) 摘心時期について

不定芽由来新梢に対する摘心処理の時期については、7月中旬に処理する方が6月中旬処理に比べて次年度の着蕾効果が高い。6月中旬摘心では調査枝の数本で副梢が発生したように、栄養成長の抑制が不十分なため着蕾枝率が低下したと考えられる。

(2) 摘心処理前の新梢の長さについて

摘心処理前の新梢の長さについてみると、新梢の長さの短いグループは、6月中旬、7月中旬処理ともに着蕾枝率が比較的高いが、新梢の長いグループは6月中旬、7月中旬処理ともに着蕾枝率が最も低い。このことから、新梢が短いほど摘心による着蕾効果が高いと思われる。

(3) 不定芽由来新梢使用の注意点

樹勢の強い樹では全体的に着蕾しにくい状態にあるため、不定芽由来新梢を摘心しても着蕾の効果が低いと考えられる。したがって、樹勢の強い樹では適正なせん定や施肥管理により樹勢を落ち着かせることが必要である。

また、不定芽由来新梢は直立に発生する枝が多いことから、2年目の新梢伸長期に風を受けて枝が枯死、欠損しやすい。せん定時にはやや多めに枝を残す等の配慮が必要である。



写真2 着蕾枝(2年目)